語文と教育　第27号　抜刷　平成25年８月30日　鳴門教育大学国語教育学会

表現するために読む物語学習の試み

―― 単元「本の中の友達をしょうかいしよう」――

金　井　千代乃

表現するために読む物語学習の試み
―単元「本の中の友達をしょうかいしよう」―

金　井　千代乃

1．はじめに

本単元は、平成24年度に前任校である鳴門市桑島小学校の３年生19名（男子10名、女子９名）とともに取り組んだ実践である。２年生から続いて担任した学年で、友達と意見を交流することが大好きな子どもたちであった。また、本を読むことが好きで、怪談物やファンタジーを中心に読み、話の筋や出来事を楽しんでいた。しかし、楽しんで読むことはできるけれど、読んだ感想を話したり書いたりするとなると抵抗をもつ者も多かった。このことから、本を読んで考えを広げたり、表現したりすることに苦手意識をもっている者が多いと考えた。友達との意見交流を好む子どもたちだったので、本を読んで感じた自分の思いを表現できれば、考えを広げ深めることにつながるのではないかと考えた。

また、中学年となり、物語を外から眺める読みへと徐々に移行していく子どもたちに、登場人物を客観的に見て、自分と照らし合わせるような読み方を経験させ、今後の読書生活につなげてほしいという思いもあった。

そこで、物語の登場人物を外から眺めるような場を設定し、読み取ったことや感じたことを表現することをゴールにする学習に取り組んだ。その試みを報告したい。

2．指導の実際

⑴　単元名（題材名）

本の中の友達をしょうかいしよう　（「海をかっとばせ」山下明生　光村図書　３年上）

⑵　単元の目標（指導目標）

〇登場人物の性格や気持ちの移り変わりをとりかかりにして、考えを深めたり広げたりしながら読もうとする態度を育てる。

〇登場人物の性格や気持ちを、場面ごとに読み取ることができるようにする。

〇登場人物の人物像を自分のことばで表現することができるようにする。

〇人柄や気持ちを表す語句を増やす。

⑶　単元の計画（全 11 時）

事　前　児童と同じ年頃の子が登場する物語を学級文庫などにおいておき、日常の読書の

時に読めるようにしておく。

第１次　学習材「海をかっとばせ」と出合い、本の中の友達紹介の計画を立てる。（１時間）

第２次　学習材を読み、「ワタルの紹介カード」を書く。

〇５つの場面ごとに、ワタルの性格や気持ちを考える。（５時間）

〇それぞれの場面で読み取ったワタルの性格や気持ちを基に、ワタルの紹介カードを書く。（１時間）

第３次　好きな本を選び、登場人物の紹介カードを書き、交流する。

〇いろいろな本を読み、紹介する登場人物を決める。（２時間）

〇選んだ登場人物の紹介カードを書く。（１時間）

〇紹介カードを読み合い、メッセージを書きながら思いを交流する。（１時間）

⑷　学習指導の実際

①　第１次…学習材「海をかっとばせ」と出合い、本の中の友達紹介の計画を立てる。

第１次は、本単元の導入である。まず『海をかっとばせ』を読んで、あらすじと登場人物をつかんだ。この段階では物語の不思議さに心を惹かれている者が多く、登場人物のワタルに目を向けて読んでいる者はほとんどいなかった。導入の段階で登場人物に目を向けて読もうとする意欲をもてるようにしたいと考えたため、教師が作成したワタルの紹介カードを見せた。すると、子どもたちの関心が登場人物へと向けられ、紹介カードを書きたいという思いが芽生えた。そこで、話し合いの時間をとり、学習計画を立てた。

【出た意見】
・好きな本の登場人物を知ってほしい。・絵を描いて紹介したい。
・登場人物の得意なことを紹介したい。・登場人物がどんな人なのかを知ってほしい。

【児童のたてた学習計画】

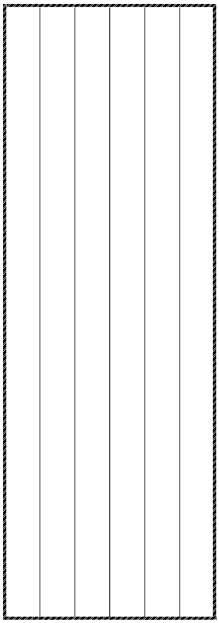
２次	1	ワタルのことを知る。
	2	ワタルの紹介文を書く。
３次	3	本を読み、紹介する登場人物を決める。
	4	登場人物の紹介文を書く。
	5	発表会

②　第２次…学習材を読み、「ワタルの紹介カード」を書く。

『海をかっとばせ』を５つの場面に分け、１場面に１時間をつかい、場面ごとにワタルの性格や気持ちを考えた。１時間の活動の流れは以下の通りである。

1　めあての確認
2　ワタルの性格や気持ちが表れている言葉を探して教科書に線を引き、性格や気持ちを書き込む。
3　ワタルの性格や気持ちを話し合う。
4　ワタルの紹介カードの下書きをする。

第２次の学習では、以下のような手引きを使用した。



本の中の友達
〈学習の手引き②〉　三年（　　）

学習のめあて

一　ワタルらしさやワタルの気持ちが表れていることばをさがして、線をひきましょう。
三つ以上は見つけてみよう。

【こんなことばをさがすといいね。】
・ワタルのポジションがわかるところから
・ワタルの思いが表れているところから
・ワタルがきめたことから
・さいしょの日にワタルがしたことから
・さいしょの日の天気から
・そのほか

★線がひけたら、そのことばからわかるワタルの人がらや気持ちを書きこんでいきましょう。

二　ワタルをしょうかいする文を書こう。

【しょうかい文にはこんなことを書いたらどうかな。】
・ワタルは…な子だと思います。どうしてかというと、…
・ワタルは、…という思いをもっています。わたしも…の時、…
・ワタルは…なのに、…をしました。わたしだったら、…
・わたしだったら、…するけれど、ワタルは…をしました。
・そのほか
さいごに①か②のどちらかをえらんで書いてみよう。
①ワタルはわたしに「…」ということを教えてくれました。
②ワタルはわたしに「…」と言ってくれているようにかんじました。

ワタルの性格や気持ちを読む際には、叙述を基にして、登場人物の内面に注目した読みをさせたいと考えた。そこで、ワタルの性格や気持ちを考えるための手がかりになりそうな箇所を【こんなことばをさがすといいね。】のところに挙げ、その中からいくつかを選んで教科書に線を引きながら考えられるようにした。

また、手引きの【こんなことばをさがすといいね。】【しょうかい文にはこんなことばを書いたらどうかな。】の部分は場面ごとに変えてある。それによって、場面ごとのワタルの気持ちの変化や、児童自身の感じ方の変化に気づけるようにした。

紹介カードの下書きをするときには、子どもたちはすでにワタルの性格や気持ちを教科書に書き込んだり、それを基に話し合ったりして学んできている。そのため、手引きには、教科書に線を引いた箇所や書き込んだ語句、友達との話し合いで学んだ読み、また獲得した語彙を使って書けるような書き出しの文を掲載した。自分で読んだことや友達と読んだことを、書くことにつなげたいと考えたためである。

各場面での子どもたちの読み取りの様子は、次のようなものだった。こうした読みを基に、それぞれがワタルの紹介カードの下書きを記述した。

【１場面（第１時）】

１場面は、ワタルがひみつのとっくんをしようと決めた場面である。ワタルの思いや決心が直接的に記述されている一方で、風の強い朝にもかかわらずうちをとび出してとっくんに向かうなど、ワタルの決心の強さを天候と関係づけて間接的にも表現している。

ある児童は、「ひみつのとっくんをすることにきめた。」というワタルの行動に着目し、「ひみつのとっくんをするほど夏の大会までに試合に出たいと思っている。」とワタルの気持ちを読み取っていた。そこで、「ひみつのとっくん」という言葉をとりあげ、どうして「ひみつのとっくん」なのかと問いをなげかけた。子どもたちからは、「夏の大会までには試合に出たいと思っているから。」「自分のチームの友達がびっくりするようなことを練習し続けて、うまくなって、みんなを安心させてあげたいと思ったから。」などの意見が出た。また、「バットをつかんでうちをとび出した。」という表現に注目してワタルの気持ちを考えた子もいた。そこで、「とび出した」とはどのような様子なのかを問いかけた。すると、子どもたちは「スーホの白い馬」で学習した言葉だったことを思い出し、「急いでいる」「自然に体が動く」などと表現した。重ねて、どんな気持ちが体を動かしたのかを問うと、「野球が強くなるための決意」というような意見が出た。そこで、同じような気持ちを感じたことはあるかと尋ね、登場人物と児童自身とを重ねる経験をさせた。

他にも、ワタルは「がんばりや」「負けずぎらい」などの意見が出た。

Ｎ児の記述

ワタルはがんばりやの子と思います。どうしてかというと、ひみつのとっくんで、百回もすぶりをするからです。ぼくだったら、風の強い朝だったらさむくて家に帰るけどワタルは、ひみつのとっくんをするためにいったので、しあいにでたい気もちが強いんだなと思いました。ワタルはぼくにあきらめるなということを教えてくれました。

【２場面（第２時）】

２場面は、ワタルがすなはまに着き、すぶりを始めるところから始まる。疲れで意識がも

うろうとするなかでもすぶりを続けていると、大きな波がせまってきて、不思議な体験の入り口に入り込む場面である。

話し合いでは、「海には、だれもいなかった。」という記述を基に、「ワタルはさびしいと思った。」「すぶりのことだけを考えていた。」「それで、さびしさをふきとばした。」などの意見が出た。ワタルの決心の強さは寂しさを超えるものだと感じているようだった。また、「足がふらつき、目が回る。」という表現からワタルの気持ちを読みとる者が多かった。「本気だ。」「ワタルは疲れている。」「気分が悪い。」「本気だったけど、疲れて気分が悪くなっている。それでも練習を続けている。だから本気。」などの意見が出た。子どもたちのなかで、徐々にワタルの人物像が確立されていくように感じた。

Ｉ児の記述

ワタルはすごい子だと思います。どうしてかというとうでが重たくなってきたのにすぶりをまだつづけていてわたしはワタルがすごいと思いました。ワタルは、ひみつのとっくんをしてしあいにでるんだというのを心にきめています。だからひみつのとっくんをしたのだと思いました。わたしもバレーがうまくなるようにとっくんをしたいです。ワタルは、わたしに「まけるな、がんばれ。」と言ってくれているようにかんじました。

【３場面（第３時）】

３場面は、ワタルが男の子（波の子ども）に出会う場面である。ワタルと男の子の会話が多く記述されている。ワタルは、男の子にすぶりをしていることやすぶりの意味を話し、男の子はワタルの練習を手伝うと言って海の中に消えていく。挿絵や、男の子が海の中へ消えるというような記述から、男の子の不思議さが感じられる。

ここでは、ワタルの男の子に対する話し口調から、ワタルは「おこりっぽい」「えらそう」と考える者が多かった。その中で、「見りゃわかるだろ。すぶりさ。」と「野球のバットをふることさ。」という２つのワタルのことばの感じが少し違っているようにとらえ、「えらそうだけど、やさしい。」と感じとる者もいた。また、最後の男の子の「練習を手伝ってやるよ。」ということばについて、子どもたちは「ワタルはうれしく思っている。」「心強い」などと考えていた。そこで、なぜ男の子は手伝ってくれたかを問うと、「男の子が、ワタルのことをがんばっているなと思ったから。」という意見が出た。男の子を、努力を認め支えてくれる存在と認識しているようだった。

Ｏ児の記述

ワタルはがまん強いと思います。どうしてかというと、きゅうに波から、男の子があら

われてもにげたりしないでそのばにずっといて、話もしていたから、がまん強いと思います。わたしだったらすぐにげていたと思います。男の子は、野球の練習を手つだってくれました。ワタルががんばっていたから手つだってくれたのだと思います。ワタルはわたしに、にげないでと言っているようにかんじました。

【４場面（第４時）】

４場面は、男の子が投げるボールで、ワタルが練習する場面である。ワタルが練習をする周りでは歓声が起こり、その様子から、ワタルの気持ちの高まりが読み取れる。男の子との練習の最後には、ワタルはホームランを打つことができ、その達成感も描かれている。

ここでは、ワタルが観客に声援をおくってもらったことに注目する者が多かった。「観客から声援をおくってもらったのは、ワタルは観客と親友だから。」という意見が出たので、「心がつながっているね。」とことばを返した。すると、「声援をおくってくれると元気が出る。」「声援をもらったので、ワタルはありがとうと思った。」などワタルと観客の関係を読む者が出てきた。また、「ワタルは、本物のバッターボックスに立っている気分になっていた。」という記述から「ワタルは夢中だった。」と読んだり、「しっかりとむねをはり、ダイヤモンドを一周する。」から「ワタルはいばっている。」と読んだりした。そこで、「いばっている」は、「ほこらしい」「達成感」ということばを代わりにつかえることを告げた。

Ｉ児の記述

ワタルは練習をしている時に、本物のバッターボックスにいるようにかんじたと思います。そこでワタルはおもいきりバットをふって、ホームランにしました。さい後にむねをはってダイヤモンドをいっしゅうしたのは、とてもうれしかったからそうしたんだと思います。ワタルはぼくに、せいこうしたらどうどうとしようと言ってくれているようにかんじました。

【５場面（第５時）】

５場面は、現実世界に戻ったワタルが、また練習しに来ると波の子どもと約束する場面である。波の子どもは男の子であり、４場面で声援をおくってくれた観客でもあることが、この場面で明らかになる。ワタルの背中があたたかかったことや、太陽の様子など、間接的な表現の仕方で、ワタルの気持ちが書き表されている場面でもある。

５場面において、子どもたちのほとんどは男の子の正体に関心をもっていた。本文を読むと、観客が波の子どもということはすぐにわかったようだった。さらに、ワタルが波の子どもに言った「じゃ、また、練習をてつだってくれるかい。」ということばと、３場面で男の

子がワタルに言った「分かった。それなら、ぼく、練習をてつだってやるよ。」という２つのことばをとりあげ、似ているから波の子どもと男の子は同じだと考えた者がいた。男の子の正体がはっきりしたところで、ワタルが波の子どもに会えたのはどうしてだろうかと問うと、児童は「朝早く起きてがんばっていたから。」「強い心が海に伝わって、波の子どもが出てきた。」と考え、発表した。ワタルと波の子どもとのつながりを読みとっていた。

また、「せなかが、ほくほくあったかかった。」という記述から、「ワタルの心があったかくなった。」「男の子と一緒にすごくがんばったという気持ちがあった。」と読んだり、最後の「のぼりはじめた太陽のうでが、ワタルのかたをぽんとたたいた。」という記述から、「ワタルは最高、と思った。」と読んだりした。間接的な表現も手がかりにして、登場人物の気持ちを読みとった。

Ｆ児の記述

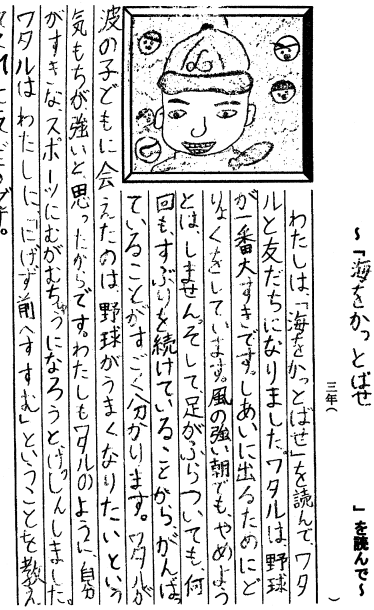
ワタルは海にかんしゃしていると思います。どうしてかというとみんながおうえんしてくれたからホームランをうてたからです。ワタルは「また手つだってくれるかい」と言ったので、わたしは、ワタルはまたホームランがうちたいんだなと思いました。だからわたしに一回できたことはなん回もチャレンジしようということを教えてくれました。

【第６時】

第２次の最後に、各場面で読みとったことを基にして、ワタルの紹介カードを書いた。１～５場面で書いた紹介カードの下書きと指導者の作成した紹介カードを参考にして書けるようにし、読み取ったことを書くことにつなげたいと考えた。

児童が作成した「ワタルの紹介カード」の例を次に挙げる。

【ワタルの紹介カード】



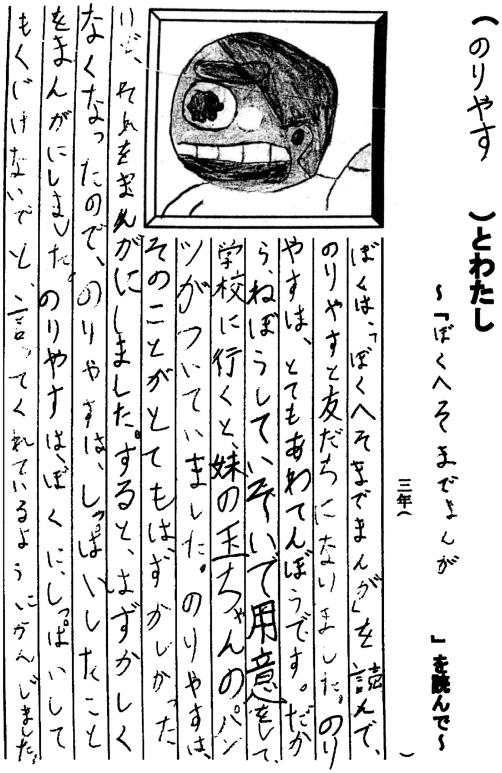
③　第３次…好きな登場人物の紹介カードを書き、交流する。

第３次では、子どもたちがそれぞれ自由にいろいろな物語を読み、その中の１つを選んで、登場人物の紹介カードを書いた。好きな登場人物について書くということで、子どもたちは意欲的に書き進めていき、２枚目を書きたいという声もあがった。一方、個別の読みでは登場人物の性格や気持ちをとらえることはまだ難しかったようで、紹介カードには登場人物のしたことのみを書いている者が多かった。

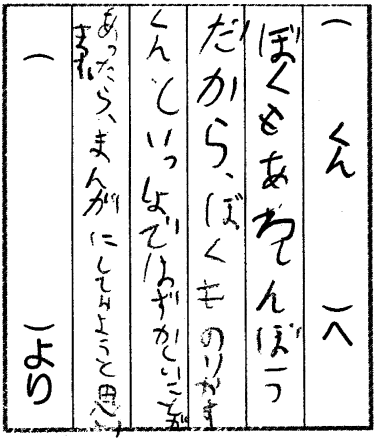
単元の最後には紹介カードの発表会を開き、それぞれが作った紹介カードを交流した。交流し合うときには、登場人物のしたことや、ストーリーの紹介などを話しながら、紹介カードを読み合った。最後に友達の書いた紹介カードを読んで、メッセージを書いて交換した。

発表会の後、紹介した本に名前を書いた付箋をつけて、紹介された本のコーナーに置いた。休み時間には、そのコーナーから本を取って物語に親しみ、感想を伝え合う姿が見られた。

【好きな登場人物の紹介カード】



【メッセージ】



3．成果と課題

(1) 登場人物に注目し、客観的に性格や気持ちを読みとれるようにする工夫

【成果】

○「登場人物の紹介カードを書いて、友達に紹介する」という活動を取り入れることで、登場人物に目を向けるという読みの経験に必然性をもたせることができた。また、その経験をとおして、登場人物に視点を当てて読むことに意義を感じる者が出てきた。

○「海をかっとばせ」のワタルの性格や気持ちが読みとれそうなところを手引きに示すことによって、本文の叙述を基にしてワタルの性格や気持ちを読みとらせることができた。

【課題】

○ワタルらしさやワタルの気持ちが表れていることばを探す手引きに例を示したことで、とらえさせたいことばについての指導者の意図が出てしまい、子どもの読み取りに大きく影響した。そのため、子どもの自由な読みを狭めてしまったように感じる。自由な読みを引き出せれば、読み取ったことを話し合ったときに広がりが出て、子どもたちが多様な読みに出合えただろう。考えを広げるための手引きを開発していきたい。

○自分で選んだ本の登場人物においては、登場人物のしたことを読むにとどまり、性格や気持ちに着目した読みを十分に経験させることができなかった。適切な手引きを用意すれば、登場人物のしたことなどから性格や気持ちを考えられたのではないかと思う。登場人物に注目して読み深める力をつけるためには、本単元を契機として、継続して登場人物に注目して物語を読む場を設ける必要があると感じた。

(2) 読んだことを書くことにつなげる学習活動の工夫

【成果】

○子どもたちはワタルの性格や気持ちを本文から読みとり、紹介カードに書いた。その際に、ワタルを自身と重ね合わせながら考え、紹介カードに書くことができた。手引きによってワタルの性格や気持ちを考えるために手がかりになりそうな箇所を示したり、子どもから出てきた疑問や感想を発問にしたりすることで、読みとったことに自分が考えたことが加わり、書くことにつながったと考えられる。

○手引きで書き出しのことばを与えたり、指導者がモデルを作成したりすることで、書くことに苦手意識をもっている子どもも自信をもって表現することができた。

【課題】

○「海をかっとばせ」の学習では、紹介文の下書きと紹介カードを書く活動が類似していて、紹介文を書くことを繰り返すような活動になってしまった。わかりやすく、意欲を

もてるような学習活動を展開できるよう工夫を重ねたい。

〇本単元では、読む視点を、登場人物と自分の比較や登場人物からのメッセージとして紹介カードを書いた。いずれは子どもたちが自ら読みの視点を創造することができるよう、今後も様々な視点で読みを経験させて表現する場を設けたい。

4．おわりに

本単元は、物語の登場人物の紹介カードを書く活動をとおして、物語を外から眺めて登場人物の性格や気持ちを読む経験をさせることを意図した単元であった。当時、３年生になって３ヵ月だった子どもたちだが、「海をかっとばせ」を読んでワタルの性格や気持ちを考え、物語を外から眺めて読むことを経験した。

単元を学習し終えて、子どもたちは「ワタルのように大切なことはあきらめないようにしたいです。」「本の中の友達は、わたしたちにいろんなことを教えてくれました。」などと綴った。物語をとおして登場人物と出合い、出合うことの喜びを感じたのだろう。

指導者として大変未熟ではあるが、今後も研鑽を積み、子どもたちに学習材をとおして何かに出合う喜びを感じさせられるような単元を構想していきたい。

（かない　ちよの・阿南市羽ノ浦小学校）